毎月一回15日発行 昭和52年２月15日発行・第85号（昭和45年９月４日第三種郵便物認可）

リベルテール

２月号

Libertaire VoL, VIII. No. 3

無　政　府　主　義　誌

昭和45年9月4日第3種郵便物認可
昭和52年2月15日発行第85号
リベルテール　定価一〇〇円（郵便料共）

人類更生の大道アナキズム研究書

何が私をこうさせたか　金子ふみ子獄中手記決定版		2,400円
解説：瀬戸内晴美　金子ふみ子歌集		500円
権藤成卿著作集２	農村自救論・日本農制史談	3,000円
大杉栄秘録 増補	堀保子ほか１９氏著	1,000円
無政府主義論	エンリコ．マラテスタ著	300円
ディナミック	石川三四郎個人紙復刻版	3,000円
アナキスト革命	ジョージ．パレット著	150円
西洋社会主義運動史	石川三四郎著	1,000円
ロシア革命の批判	Aベルクマン著	200円
黒色青年　黒色青年連盟機関紙　大正１５年創刊号より昭和６年終刊号まで復刻		2,500円
黒色戦線　アナキズム文芸思想誌　第１次昭和４年創刊号より終刊号まで復刻		5,000円
労働運動第５次昭和２年復刊号より終刊号復刻		〈近　刊〉
差別とアナキズム・水平社運動と アナ・ボル抗争史	宮崎晃著	1,600円
君民共治論	権藤成卿著作集第３巻	3,000円
無支配への道	マラテスタ著作集１	300円
アナキズムのＡＢＣ	ベルクマン著	100円
古事記神話の新研究	石川三四郎選集１	2,200円

〈解説・石川三四郎論　大沢正道〉

〒372 群馬県伊勢崎市中町和田 電0270-24-0776
郵便振替口座　宇都宮 11015 黒色戦線社　大島英三郎
東京事務所　電03-735-1246
〒144 東京都大田区西蒲田７丁目６１番８号エンリコビル４階
国鉄蒲田駅西口下車，蒲田銀座アーケード街歩いて５分突き当り左隣，毎月第2,第4日曜午後1時より4時共学読書会,初心者に公開
販売書店　東京，神田ウニタ・新宿模索舎・吉祥寺ウニタ・早稲田文献堂．京都，中・寺町二条上・三月書房

■リベルテール　Le Libertaire
■1977年２月15日 発行　VoL, VII . No. 3
■編集兼発行者　三浦精一
■発行所　東京都練馬区大泉学園町２１９０
萩原晋太郎方　リベルテールの会

毎月１回15日発行 振替 東京１３３８３０番 三浦精一

今月のことば

福田首相はどこまでやるの？
体制内知識人と対話し
党内各派と協調し
韓国及び財界と連帯する

〔批評〕
テユルゴの後を継いだネッカーは政治家というより財政家だった。彼は財政にのみ視野を限りものごとは小さなことしかみえなかった。
ークロポトキン著フランス革命史ストック版43頁よりー

最近の中国文化界

江青は「黒を使ってはいけない」というが黒を使わない中国画（とアナーキズム）があり得ようか
ーハン・スーイン女史談ー
朝日新聞2/7朝刊よりー

註（とアナーキズム）は挿入語・現在四人組は〈黒〉と呼ばれている

ロッキード裁判の田中被告答弁書読後感

わかった　わかった
よっしゃ　よっしゃの角さんから
ないないづくしの角さんへ

註「祖国愛」と「愛国心」はならづ者の隠れ家です
ーエマ・ゴールドマン著「愛国心」について　よりー

目次

巻頭言　思い出すこと　三浦精一……2
そこはかなき物語　H・あきた……3
「文学・昭和十年代を聞く」を読んで　吉葉雅俊……6
矢田洋氏からの手紙（一）……7
一波万波（中沢さん・ハギシン・新明さんより）……8
リベルテールのために―
はしもと君への手紙　アキ・ヤマモト……9
回答、理論と組織
または連合のこと　はしもと・よしはる……14
海外だより……

巻頭言

思い出すこと

三浦精一

それは私がまだ辻堂にいた頃、石川さんは六十才位のとき、私の家で古代史研究会を開いた。いつもくるのは原田理一君、その甥の道治君（当時外国語学校の三年だった。）で道治君はロシアの学者の古代史の本を読んでその話をした。

そのある時のこと、石川さんは日本の征服者天孫民族のことに触れて、日本武尊のやり方の卑劣さを話したのをおぼえている。日本武尊は女装してクマソのヤソタケルを討ち、出雲では奸計で相手を殺していると。

勝ちさえすれば、そしてそのためには手段を選ばないのが戦の常道で、征服者の正義である。佐々木小次郎に勝った宮本武蔵もそうだった。これは資本主義社会の倫理でもあり、国家存立の基礎でもある。そのためにスパイ網もはりめぐらされる。そのためにワイロによる買収工作も常識となり、勝つための政治によって無知で、正直で、弱い民衆が、主権在民などという訳の分らないお題目で奔弄される。戦前は皇国史が巾をきかせた。

クロポトキンはレーニンとの対話においても、レーニンの段階説を最後まで拒否し否定した。レーニンたちはブルジョア階級が無くなったロシアに階級は存在しないと強弁したが、共産党員は新しい官僚階級となって民衆に君臨し、世界で『最』暗黒な警察政治が行われている。プロレタリアが強者の倫理を採用した革命の末路である。

アナルシズムは弱者の倫理である。無知で正直で、無力な民衆の倫理である。

石川さんはこうした絶望的な気持をもっていた。それは石川さんが戦後「皇室中心無政府主義」などというものを考えたことでも分る。戦争中皇国史観に躍らされた民衆の悲惨な姿に涙した石川さんは、その民衆が終戦の詔勅で、おとなしく静まり、新に生きることを考えはじめたのを見て、一つの政治的な配慮をしたと私は思うのだ。

戦争前のこと石川さんが私に話したことがあった。「君、日本人は不思議な国民だよ。親が死んでも涙一つこぼさない兇悪犯人といわれる男が、天皇陛下の話というのに泣くんだよ」と獄中での思い出を語ったことがある。その石川さんは日本武尊の卑劣な話をした人だ。皇国史観の空しさは知っていた。だが無下に否定されない「子供の世界の考え方」というものを配慮したのだろうと思う。

「絶望的」とも言える私の言葉に、石川さんは「その絶望を超えて革命が来る」と答えたこともあった。

そこはかとなき物語

H・あきた

初冬の昼さがり、私の自慢の奥座敷、我家より徒歩十分の山頂、南向きの枯草の斜面に寝そべって斜にさす太陽を直角に受けると、ふんわりとした大地の暖かさが肌に心地よい。・・・肩をたたく者がある。目をあけると、これは驚いた。ライオン、馬、モグラなどの哺乳動物、わに、へびなどの爬虫類、蜂やくもなどの昆虫、それに鳥類、魚類、バクテリアなどが私をとりまいているではないか。

その容子がどうもおだやかではない。いつも柔和な羊までがおちつかない顔をしている。やがて馬が私の前に来て話しかけた。「聞いて下さい。お話申上げたいことがあるのです」。・・・逃げるにも逃げられない。腹をすえて聞く。・・・「この地球上で生きとし生けるものが、あるいは助け合い、あるいは天敵となって秩序が成り立っていることは君も承知であろう。…だが知らない人間が案外に多い。人間をふくめてわれわれ動物が生きて行かれるのは誰のお蔭だと思う」。「それは太陽、空気、水、土壌といった限りない宇宙の恵みによるもので一言に言いつくすことはできないさ」。「その位のことは誰でも知っている。君はもっと切実に身近なもので大事なことを知らない。君は食わねば生きてゆけない。問題はこれだ。君たち人間は我々動物を食っている」。ははあ、さてはその復讐に来たなと、とっさに身構えをする。ところが馬も他の動物も一同平気で淡々としている。「まあ君、そんなにあわてなくてもよいさ。我々はさっき言ったように、その事は天敵行為として公平な宇宙の法則として悟っている」。バクテリアも言った。「人間たりとも例外ではないさ。君たちの肉体は僕たちの安住の地でもあり、大いに呑み食いさせてもらっている。お互様だよ」。「結論を急ごう」と馬が大体次の如く長広舌をふるう。

われわれ動物は植物を食って生きている。食用動物はそれを間接的に食っているのだ。人間は贅沢に植物を食ったり、肉を食ったりするが、結局植物を食っているのだ。その植物も生物としてわれわれの仲間である。植物は光合成により自分の力で大地から生命を創造し自活することができるが、動物はそれができないで植物に依存する。生物を「光合成生物」と「光合成不能生物」にも、あるいは「植物」と「非植物生物」に分けることができる。非植物生物は怠けものの「ダニ」のようなもので植物に寄生している。だから「自活能力生物」と「自活不

能生物」に分類すべきであり、「高等生物」と「下等生物」とに分けられる。植物は我々の生殺与奪の絶対権限をもつものである。・・・この植物に対して横暴な人間共の振舞が眼に餘るようになり、植物の神々の御機嫌が悪い。植物ゼネストの噂までも耳に入る。馬耳東風とは行かぬ。人間が困るのは良いとしても、我々も巻添えになってしまう。皆で植物の神々の所に行こうではないか。そして我々の真心を披瀝して今後のことを考えようではないか。

この馬に私は反問した。「地球上三十億もいるという人類の中で、よりによって何故我輩の所に来たんだ」。「我々動物は知慧では人間にかなわない。めったに近ずくこともできない。だから人間の中でも、いささか知能の低い君を選んだまでだ」と言う。

×

話はもっと面白く続く。そして「あきた君」が、ふと目が覚めた時には日は大分西にかたむいていたと結ぶ。ガリバー物語にしてもこの話にしても、日本滅亡といった暗い想像の飛び交う中で、別の意味での革命の神話、再生の神話を想像させ、創造させるものではないだろうか。（三浦）

『文学・昭和十年代を聞く』を読んで

吉葉雅俊

所謂文学者とか文士、小説家と呼ばれている人々がいる。ちょっとジャーナリストと違うと思うのだが、そういう人々の精神的風土というか来し方というか、そんなものが近年しきりに文章化されている。だいたい小説の形になるのだけれど対話という形式でも現われ、今僕達が興味を持つ無政府主義との関係も記されているのだ。

本書『文学・昭和十年代を聞く』（注1）は八人の人々にインタビューのような形で一九三五年以後を主に、文学運動の稗史を聞くような形で戦中のその当人の行動を聞き、まとめたものだ。従来詩人の戦中の行動に関してはいくつかの証言（注2）があり、それなりに知ることができたが、小説の分野でも本書によってかなり知ることができるようになったと言って良いだろう。

この八人の人々全部を書くことはできないので特に舟橋聖一さんを少し書いてみる。舟橋さんの戦後の生活について弟さんが最近別冊文芸春秋に思い出として書かれておられるが、それは少しく皮相な所がある。そこまではふれられないがこのことも記しておこう。

先に舟橋さんには『真贋の記』（注3）という自伝のような小

説があり、僕は水戸高時代の土方定一さんとか舟橋さんのアナキズムに興味を持っていた。舟橋さんはそれをアナルコ・サンジカリズムと言っているが、それはアナキズムであろう。『真贋の記』はただ小説の形で発表されているので僕にはどの部分に贋があるかわからなかった。中条一重との敗戦まじかに再会した時の会話は少しく自身の思い入れが入っているのではないかと感じている。そのような細かなことは舟橋さんが死んでしまわれた現在わかりようもないのだが、舟橋さんがアナーキズムに好意とか興味を持っていた証拠にはなるだろう。

舟橋さんのアナキズムに対する積極的な発言には「彼（注・大杉栄）の説く行動的な無政府主義とも云うべきアナルコ・サンディカリズムの理想を、おほろげながら、理解できるような気がしていた」（注4）とか「ぼくは、アナルコ・サンジカリズムと親近的な関係ですよ。」（注5）というような言葉がある。これらのことで気づくのはどうも舟橋さん自からは「僕はアナキストである」というような発言はしてないのではないかと思う。しかし『真贋の記』に現われる舟橋さんの証言はアナキストのそれである。この小説はさわやかなものというわけにはいかないがそのアナキズム振りが舟橋さんという人を知るには、おもしろい本だ。

さて本書であるが若干の偏向は認めざるを得ない。

舟橋　ぼくはね、コムニズムはデマゴーグだと今でも思っていますよ（笑声）。これもはっきり一生変わらないです。別に反代々木という訳じゃあないけれど、日本共産党の本質的な部分はデマゴーグで、ウソがあると思っていますよ。

―それには賛成しかねますが、云々。（注6）

一人の人の主観的な言動に対し、主観的な意味を述べるのはもし、記録を考えてのインタビューなら偏向といわざるを得ないだろう。しかし私は偏向というものを認めることはできないが、いわばその人の気質に由来する仕方のない面もある、消しようもないものだと思うからそれほど悪しざまに言うこともないと思う。

それらのことを抜かしてわずかに本書を書く。

この記録、本書が持つ今日的意義は戦後長期に渡って続いた、文学を職業とする人々の戦争への大衆動員を行ったことに対する反省と責任の、ややもすればあいまい化していった行程を各個人の戦中態度を自述してもらうことによって明確化しておこうとする、その作業の貴重さであろう。実際書中にはいくたびか実名を挙げてもら

いたかった人々がいる。そのような不満を残しながらも各個人が歩んだ、その戦中の行程にはいいようもない敬意が湧き起り我身を振り返らせる。

昭和十年代舟橋さんは行動主義文学を唱える。詩人小熊秀雄がそんな彼を諷刺する話が『真贋の記』には載っているが、本書では小松清との関係が述べられている。その辺のことは『真贋の記』の方がくわしい。おそらく行動主義文学とはファシズムとはどうしても肌のあわない舟橋さんの「能動精神」が始めた文学運動であったろう。

行動主義が崩壊するとそのような形をとっての反戦は成立しなくなる。舟橋さんは以後戦時にありながら以前と同じような生活を続けることによってサーベルをさげることや徴用を拒否する。サボタージュが最大の抵抗になる時代にも、以前と同じようにサボタージュを行ない自我を放棄しなかった。

本書のこのインタビューだけを読んでもわからない所が読む者にはでてくるだろう。それはこのインタビューが『真贋の記』を読んだ上でなされているからである。

戦後三島事件においては三島君を作家として尊敬していたという質問に対し「三島君を作家として尊敬していましたから」（注7）と発言し、美学を嗜みとした自己の一貫性を貫ぬいている。舟橋さんは相撲協会の理事かなにかになっていたが、その時のエピソードを武田泰淳だと思ったが語っていた。舟橋さんは「君が代」が流れても起立をしなかった、と。

僕としては舟橋さんの女性観、社会主義観やモラルとの葛藤、社会主義などいろいろ聞きたかったことがたくさんあったが、それらは舟橋さんの個人の秘密に属することで他者の無責任な質問の入る所ではないだろう。

今も僕はＮＨＫがＴＶで放送した『花の生涯』のせいもあって舟橋さんの小説など読む気にならないのだが、本書を読んで舟橋さんの人柄にふれられたのはよかった。

余分なことだが本書で金子光晴のインタビューもしており、その中で金子さんが「アナーキズムというものには愛想をつかしていましたからね。」（注8）という発言をしている。僕はこれを不思議な発言だと思った。アナキズムというのはアテにする思想ではないだろうし、アテにされたアナキズムだってこまってしまうだろう。金子さんの作品を考えると少し思うことがある。

（注）

1『文学・昭和十年代を聞く』一九七六、勁草書房

2たとえば『詩人と権力』浅尾忠男、一九七二、新日本新書

3『真贋の記』僕は『舟橋聖一選集第10巻』一九六八、新潮社版で読んだ。
4『『右同書』四七頁
5『文学・昭和十年代を聞く』一四四頁
6『同右』一四五頁
7『同右』一七〇頁
8『同右』七九頁

訂　正

一月号の〝今月のことば〟中筆者から訂正の申し入れがありましたのでお知らせします。

「〝虞よ虞よ　みをいかにせむ〟というのは、むかし中国の皇帝が国家滅亡の瀬戸際だったかと思いますが、愛妾を顧みて〈虞よ、虞よ汝をいかにせむ〉と歎いたという故事を踏まえて、虞よ（おそ）れよではなく、虞よと読んでもらうつもりでした。（夏目漱石に「虞美人草」という作品あり）そしてまらさえたたずなる時分には流石の虞美人も、老妻と同じく、皺のよったバアさんになって居ったかも知れぬとの心から、バアさん美人（？）の絵を入れたことでした」　（中島康允さんより）

☆虞美人草とはひなげしのことだとは学校で習った筈ですが故事来歴にうとく、読み違えまして、すみませんでした。　（はしもと・よしはる）

矢田洋氏からの手紙（一）

番外前口上

エ、数字的には相当日数時間が違ってしまいそろそろ77年1月号が発行される本日13日。11月号ではＲ０８氏とか云うアホな人の文面が登場し12月号ではさっそく帋し上げにあって、一応かっこうだけでも助け舟を出す真似位いしてやろうかなと思ったけど元来Ｒ０８氏などと云う人は知らぬ存ぜぬしご恩もないしましてやその人格をもってしまった文章を助けるなどと大それたことができる筈がない。とは知りつつも、吾が知人（否！痴人か）Ｒ０８なる名と良く似た名をもったやつがいる誼も手伝って只今の執筆に到っておる。更にＲ０８氏の云々など書くようじやともかく世は激動の時と云うのによほど暇人が居らんと覗えよしのオ。

サテサテ12月号（偏執後戯オットット、ゴメン）編集後記によると色々断り書きが書いてあったのだが元来不真面目と無責任と酔狂と風狂のゴッタ煮の中で悶えているワチキに責任ある立派な発言など所詮できる訳ないのでといってしまえば沈黙せねばならないのでそう云った言動には微動だにせず傍若無人喋りはべります。よって

どんどん検閲して没にして下さい。そんな事には元来期待して居ないし当然の事と思います）股ッそんなことで私がめげる訳もなく活きつゞけるでしょうから。第一私の立脚点なるもの全く不鮮明極まりないのですから。私は私の存在として書いている、しかし受け取る側（？）にとって私の存在とは何なのでしょう。まず受け取る側と云うのは編集者でしょう？その編集者にとって私は何なのでしょう。1個人なのでしょうか、1読者なのでしょうか、1リベルテールの会会員になってしまってるのでしょうか、或いは1異端無政府主義者とでも思われているのでしょうか。私としてはどうとられて居ようが即座にどうこう出来る訳もないしさして気にはしていないのですが〝立脚点を鮮明にして〟と言う意味が良く分らないものですから。立脚点が鮮明であり責任ある（？）発言か否かはこちとらがいくら一生懸命と考えていようがそれを判断するのはこちらではなくこの手紙の受け取り人なのですから。サテサテ毎度乍ら前口上が長びく悪い傾向をこれ位でもって自粛し次に移ろう。

（注・この手紙は長文の為、今回は前口上のみ掲載します。）

一波万波

リベルテール一月号拝受お礼申上げます。水沼の熊さんが死んだとのこと、驚き入りました。去年「啓衆」で浩さんに逢ったとき大分弱ってはいるときいたが、そんなにあわてて死ぬとは……水沼三兄弟の中で辰ちゃんは兄貴みたいで尊敬しており、熊さんとは心おきない友だちだったが……しっかりした娘が二人いたのでいい臨終だったとは思うが。今度はだれの番かなどと考えるのはいやなことです。

山梨の小島康彦君が元気のようで、このようなことは救いです。彼が田舎に引っこんで何十年になるか、いまだに志をまげずに頑張っていることは嬉しい次第。恐らく小生のことなど忘れているかも知れませんが…

（中沢輝夫さんより）

平岩　巌氏逝く

ハギシン

親分肌の好男子で、右翼からアナに転じ、大正後期から昭和戦前にかけて不羈奔放の活躍をされた平岩巌氏が、旧臘二五日、心筋梗塞で急逝された。享年七八歳。

戦後は、会津くろもり手打ソバと山菜料理の巌蛹洞を経営された。そして、神近市子の選挙資金、亀戸事件犠牲者記念碑の建立、近憲氏の追悼集会、逸見吉ちゃんを励ます会、毎年の荒畑さんをねぎらう会、堺枯川獄中句集の目筆写真版出版、辰野事件公判闘争等、私の知る範囲でも背後からこれだけ私財を投じて支えられた。私も高尾平兵衛伝の私家版では半額近い費用を援助して頂いた。平岩氏には頭が下る。不自由な足で、大逆事件講演会や坂本清馬追悼会にも出席された。

したい仕事は色々あり、当日も知人に手紙をしたため御本人は全く死を予期されなかった。

よき先輩同志が又一人、地上から去られた事を悼む。因みに七六年の賀状には次のようにあった。

「御康音でいます。近時老懶弥々加わり閉口しております。驚天動地の吉報が聴きたいものです」

……本日はリベルテール御送り下さいましてありがとう存じます。

毎日極寒の日が続き今雪で一休みといったあんばいで……あまりさむいと目まいがします。52才になりこの年では仕事とて思う様にはゆかずバイト程度で生きています。たとえどんなにくるしくとも生き続けねばなりません。生きて生きて生きぬくぞ。最後の真の勝利のその日まで、まっとうな人間の生きざま、その生きよう。必ずや正義えの、自分自身えの生の証しをかけよう。アナーキー万才！連帯万才!!

（新明　文さんより）

〔雲と山と湖の美しい絵葉書をいただき、有難うございました。〝山は晴れ野は涼やかにすゝきゆれ。〟（〝秋の磐梯高原〟をみて）豪雪がきて人は初めて春の訪れを心待ちにするものです、まっとうな人間の生きざま、そうありたいものです。〕

リベルテールのために――

はしもと君への手紙

リベルテールではしもと君が〈わが国アナーキズム陣営内の低調ぶりは眼もあてられない状況である〉と歎いている。この原因はどこにあるか？それは出された問題について議論が発展しないからである。これはマルクス主義と違って、教条が樹立されていないので、それは理論的に正しいとか、間違っているとかの議論が立て難いからである。はしもと君は続いて〈私達に欠けているのはこの種の議論であって、空疎なひとりよがりの理論を弄ぶより、先人について謙虚に学ぶべきである〉と書いているが、学んでからでないと話しができないのなら、

学者、勉強家でないと提起されたことに議論は展開しない。この種の議論とは何か？〈転ばない前に現実に有効な理論から学ぶのは重要である〉だがバクーニンやクロポトキン、マラテスタなどの生きていた時代とこのアトム時代とは違う。いまいかに生きるかの問題に使える便利な理論をどこから、誰から得ることができるか？

その点マルキスト、科学的社会主義者は幸いだね。あれは資本論も唯物史観も弁証法も資本主義の発展動向の分析技術だから、資本主義がある限りは議論にこと欠かないから。ただ株式街のケイセン屋と同じで当るも八卦当らぬも八卦、常に50％の適中率はある。ただ十九世紀の経済分析から、資本主義の次に共産主義だというミダの御来光の念仏は醒めた人民には通用しないだけである。

はしもと君の歎きをカバーする方法はもっとこの陣営の人間が気がねしないで、大胆に討論することだ。八方破れでよい。それをちゅうちょすれば、素養のあるインテリでないと話ができないことになる。はしもと君はバクが〈民衆にとって、すべての人にとって本当の学校は人生である〉といったと紹介している。人生が学校で、民衆が考えるには、むつかしい知的な、学問的な作業は有害なのだ。〈精緻な議論は人を制御するために作られる〉と言った石川三四郎の話も伝えている。そうなのだ。荒っぽい知的でないナマの議論を掲載すれば、リベルテールも活気が出るだろう。

〈混迷と無意味のなかで〉あの一文ではしもと君は何を言おうとしたのか？全国組織とか、連盟とか、熱意は評価できるがアプローチの仕方が不十分だ。〝総論では一致できて、各論では一致できないとはどういうことか〟この辺が核心か？当面の戦線の組織論か、連盟の再建も三年越しか四年越しか？こんな議論は所詮は実りのない空論である。何かをやろうとすれば組織はできる。一夜で出来る。が組織に乗っかってやることはアナーキストは諾とはいわない。連盟をつくるのは何のために。支部を作って、会員を、現場を、それで動こう、動かそうとすれば何回やってもそれは賽の河原だろう。

アナーキズム運動とは文化運動か？文化運動なら会を作って、会員を尋り、それがわが生き方の座標をそこに求めるために、月会費か年会費を納める。これなら可能だ。どうも文化運動の臭みがあるが、それでいいのか？

（アキ・ヤマモト記）

〔回答〕私信の形でしたが〈リベルテールのために〉とあるので掲載しました。1976年3月号の一文〈混迷と無意味の中で…〉を読みかえしてあの時点での発言を今また取りあげるのはどうかと思われるかも知れません

が、事情は展開していないし、基本的に私の方で更めなければならないと思われるものは何もなく、またアキ・ヤマモトさんの意見で部分的に補強されていますが、誤解され易い部分もあるのでそこを明らかにしてみましょう。主題は理論と組織ですが、すっきりするのは理論ー武装した組織が何故持てないか、と理解した方が判りやすいでしょう。ヤマモトさんはアナーキズムはマルクス主義と違って正・邪正統と異端を区別する基準的な理論ー正統的マルクス理解ーにあたるものがわが陣営では＜立て難いからである＞と言われる。この理解はよくアナーキズムは教条じゃないよ。バクでもクロでも批判するし、その教説は絶対じゃないんだーという私達一般の了解にあたるものです。けれどその後の文節に引用されたように＜ー空疎なひとりよがりの理論を弄ぶより、先人について謙虚に学ぶべきである＞を逆手に取って＜学んでからでないと話しができないなら、学者、勉強家でないと提起されたことに議論は展開しない＞のかとは私の意味に含まれていない議論になります。＜空疎なひとりよがり＞に至るまでの私の文の流れでは大所高所からの議論は注意しよう。理論とは＜個人の体験を普遍化し、共有化して更に深化させ発展させる為に歴史があり、伝統がある＞ように、抽象化して所有するものであるから、現実に有効な理論から学ぶのが重要だと言ったのであって＜アトム時代を、いまいかに生きるかの問題に使える便利な理論＞は、おっしゃる通り＜どこから、誰から得るか＞は私も知りません。けれどバクやクロやマラテスターは彼等の生きていた時代と異るわれわれの時代にも十分聞くに堪える発言をしているのです。例をあげましょう。フランス革命をどう評価するかは各自のやり方があるでしょうが、クロポトキンはそれが思想（理論ー但しこの場合はブルジョワイデオロギー）と民衆の活動（実行）によったと説いています。

「二大潮流が準備されて、フランス大革命になった。その一は国家の政治的改造に関する中等[*1]階級から来た思想の潮流で、他の一は彼等の経済状態に於て直接且つ確定的進歩改善を取得することを要した農民と都市に於ける労働者から来た実行の潮流だ。是の二大潮流が両者に暫時共通であったところの目的を実現するために出合って、結び合った時、彼等[*2]がある期間相互に助け合った、その結果が革命であった。」

フランス大革命史　第一章　革命の二大潮流クロ全集10岩佐作太郎訳ー

＊1は「ブルジョワジーの新らしい理念の潮流」とある。

＊2＜彼等＞とは二大潮流としてのブルジョワジーの理念と＜大衆＞の行動の出逢い、相互補完のこと。むろんクロはブルジョワによるこの革命の裏切り過程を本書に描いている。

私が敢て引用するのはもしクロのこの本に就いて学べは、少くとも現実に有効な理論としてーフランス大革命はブルジョワ思想ではクロの指摘したようにルソーやアランベール等百科全書の思想家達のイデオロギーと共に大衆の社会的経済的要求としての行動が組合わされて始めてできたのであって、そのどちらか一方だけではできなかったかも知れないーということが学べる筈で、これはアトム時代でも真実かも知れないと思うからです。とすれば過日リベルテール誌に載ったような、大衆とは別な道を歩むのがアナーキストだとか、大衆には体制派と反体制派があって、自由な知識人は後者と共に活動するのだという議論は、大衆なんて俺のことかい？と反問するのと同じぐらい意味の判らないことになるでしょう。また知識人の役割について知ろうと思えばバクーニンの＜ロシア革命＞の項を読んで下されば一目瞭然です。バクはマルクスとの思想闘争の中から、またその周辺の知識人＜ウチンマッジニーその他）から学んで、いわゆるブルジョワ、中間階級、労働者階級からでるインテリ等の区別なく、何らかの理論を作って民衆を教導するのは結局権力へつながるとしているのです。しかしだからと言って理論は不要だとは言っていません。フランス大革命で大衆の行動を補完したのがブルジョワ・イデオロギーであったのなら、今度必要なのはそれに代るものとして、アナーキズムだとするのが私の考えですが、それは何も私だけがそう思うのではなく、これまでのすべてのアナーキスト達が、アナーキーでやろうとする人なら誰でも、貴方もそう考えていらっしゃることでしょう。

さて組織についてですが、＜連盟の再建も三年越しか四年越しか？こんな議論は所詮実りのない空論である。何かをやろうとすれば組織はできる。一夜でできる。＞そしてアナーキストが承認しがたい組織は＜組織に乗っかって…会員を、現場を、それで動こう、動かそうとすれば＞さような組織はできないと断定しておられるようです。全くお説の通りで、われわれは例えそれが民主的中央集権制であっても、組合員がいて、支部長がいて、理事がいて会長や総長のいる組織は、それから既成の諸政党がどんな名称で衣がえしようとも大して信用しない、不幸な、または幸運な組織論をもっています。しかしまたそれ故に、若い人達の末席にいて三年越し、四年越し

かけて議論を重ねてきたのであって、その過程で貴方が空論と断定された多くの意見はあえなく潰れ、去ってしまいました。今では気息えんえんで、連盟に情熱を燃す若い人はいなくなったー或はいても僅かだというのが実情のようです。むろんそうなったからとて誰の責任でもないかも知れませんが、（＊付記1）少くとも古くからアナーキズムでやって来た人なら、自己の経験と思想をひれきして、できるなら若い人達が働きやすい場を設定するよう努力すべきではないでしょうか。それとも若い人達は箸にも棒にもかからない程、マルクス主義的で、または個人的気分的アナーキストで、どうしようもないのでしょうか。もしそうならいづれの場合もアナーキズムに就いての思想の問題、またはそれを実践する人間的品性の問題として、私達は相互に批判向上すべきであって、さような場になるのが連盟だとすれば、これは決して一仮でできるようなものではないことが理解できるでしょう。連盟をつくるのは何のためか？回送されていた呼びかけのビラでは、＜政治性をつき破り、国家を打ち抜く個の思想とそれに立脚した運動を創設せねばならない＞とか＜アナキストの連合を妨げているのは何か。それは早急に解明されなければならない＞とか、ありましたが、それでも多様な現状認識を踏まえてその上で何らかの共働をしようとの共通の了解をとりつけることから始めているのであって、駄目なのはアナーキストであってアナーキズムではないとか、くっつくのはわずらわしいから嫌だ、まで含め、いづれそれらがわが陣営の＜混迷と無意味＞を深めているのだとするのが私の現状認識です。

最後のアナーキズム運動は文化運動か？の反語的指摘は「リベルテール」の現状についてのものかと思いますが、勿論、それだけでなく労働運動、住民運動、身障者コロニー活動、ウーマンリブ、環境保全、等、各自が各自のやり方で多方面に活動するのは、それこそ自由のための闘いは自由なのであって、リベルテールの編集に参加している立場から言えば、そうした現場の闘いの意見や記録が集まるようになれば、「リベルテール」自体が変革されるだろうし、そうなると文化的臭みだけでなく現実の重みのある誌面ができると思います。いづれにせよ今度のご指摘は有益でした。

付記 1 一昨年の連帯会議の時、会場難にあたり、貴方が心よく集会の場を提供して下さって、＜啓衆からのあいさつ＞を贈られたのを忘れてはいません。また物故した同志の遺稿集の作製やご自分の古代史研究について努力して居られるのも身近に見聞しています。ただ時々、味方でないものはすべて敵式の言行によって、貴方

の真情が伝わらないのを残念に思うのです。少くともより強い者はそれが知力、権力、金力、学問的権威、体力であっても、より注意深く配慮して生きるべきなのが現代でしょう。でなければ子供が池に投げた一石で、蛙がどんなに迷惑するかを教えた童話の絵になります。

2. 総論で一致できて各論では一致できないとはどういうことかー連帯会議の印象から述べたものです。出席者の多くはアナーキズムとは何かを理解していました。だからアナーキズムでやることに異論はなかったのですが何をどうやるかでは一致できないのでした。原因は①何らかのグループを作るとか活動をしている人達は自己の活動を大切に考えー当然なことですーそこから他②のグループや個人に同意や参加を求めたのです。しかし他方にはどんな個別の活動もそれは良くて改良主義にしか過ぎないのであって、アナーキズムになり得ない、まずアナーキズムでやると決意することから始まるのであって、それさえできれば活動はおのづからできるとするのでした。更にこの外周に③どんな組織も不要だ、大体集って何ができると言うのか、やりたい人は一人でもやるだろうし、やる気がなければどんな組織をもっても無意味だと考える人がいました。私の見るところ、ヨーロッパでも連合を作る場合、この三点が問題になるのであって、その限りではわが運動も例外ではないと言うことです。ところで①の人達の特長はアナーキズムの範囲を拡大して、時に市民運動か民主運動に見まがうばかりになり、できればいわゆるアナーキストとは一線を画したがるのです。②の人達はそれをほとんど無意識に知覚するので、なおアナーキズムの原理原則をふりかざして③の人達と同じく固執するのです。つまりアナーキズムとはこういうものだとの何らかの体験や自己の理解から①のような拡大は野合であり、改良主義と考えるのでしょう。更にここに日本的知識人の特長として一切がそうでなければ無との二者択一的論理なり美意識が働くのでしょう。それが例え亡びに至る道であっても、状況として自己の選ぶ道は正しいのであるとの自覚で生きようとするのです。幸徳秋水が直接行動を選び、これに拍手した多くの若者達がそうであったと私は理解しています。しかし自覚や決意だけでは現実は動かないのです。自覚や決意は自己のものであって、それを共有化する手段なり方法を講じなければ自覚倒れ、決意の立枯れになります。まして、俺はこれだけのことをしているのにお前はなんだーというような言動であっては付合きれないでしょうし、それを正当化するための理論となれば、突出した前衛論になるでしょう。私が異議申し立てをするのはこの種の空疎な

ひとりよがりの論議です。次ぎに③の人達は嫌なものは嫌だという個性は持っているのですが、それ以上でもなくそれ以下でもないということです。アナーキズム運動はやりたい人がやればいいとしながら、さて自分は何をしているかとみれば、生活をしているという訳です。志（思想と実行）がアナーキズムにあるのなら、少くともそれでやっている人達の運動は好意的にみるとか、参加するとか、苦言を呈するとか、同志的連帯の自覚があれは何らかのかかわりをもつ筈ですが、批判はしても自分の手は汚さないようにみえます。または汚したくないのでしょう。ここではアナーキズムの核にある個人主義の傾向がマイナスに働いて、隠れた場所からの遊撃手の役割しか果さないようです。私が言いたかったのはこれらの特長がもちだす各論の、日常的触れ合いや討論や批判、同意を積み重さねる場としての連合の必要性であり、それは出来る所から連合するしかないだろうということです。

また、〃ローマは一日にして成らず〃で一夜にしてできる組織は一年ともたないだろうかと考えます。

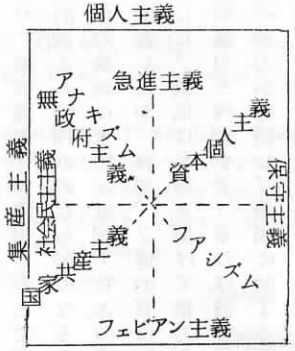
（はしもと・よしはる）

海外だより

☆香港のフアン君から〈地下報〉が送られてきた。また英文のマイナス9〉の恵贈を受けた。この方は記事で〈地下報〉とだぶっている部分ー毛沢東に関するものーがあるから〈地下報〉で彼等の言葉を聞いてみよう。記事中「われらの話」では…われらがこの雑誌を出す目的はわれらの意見とそれほど大差のない友人達、同路の人びととの交信を希望するからである。無政府主義／自由共産主義には多くの人が接触し、その影響は大きい。そしてわれらの希望はその思想に通達し、香港、中国、世界各地の反体制、反搾取、反強権的運動と精神を実際に支持することにある。

(1)ある人びとは無政府主義を極左派だとする。彼等は無政府主義を一直線の最左派におき、毛主義者、トロッキー主義者と同一視する。われらはそれを政治思想、また意識形態としては一線上におくが、それも左右に分化して極左、極右、中間偏左、中間偏右とするため人の誤解を招きやすい。図をみて戴きたい。無政府主義はファシズムとの対極にある。無政府主義者は集体（集産）主義者で個人的自由を強調する。ファシズムは専制的で資本主義と資産階級の利益を擁護する。無政府主義は国家

共産主義（包括されるものとして、毛沢東主義、スターリン主義、トロッキズム等形式上でのレーニン主義）の対極にある。国家共産主義者は無政府主義者と同じように私有財産を否定するけれども、その手段は専制的で彼等の建立する社会は個人の自由を剝奪するようである。



(2)われらは資本主義に反対する

資本主義は社会において人が人を搾取し、資本家は労働者を搾取し、帝国主義者は殖民地の人民を搾取する。資本主義社会では〈疎外〉現象が起き、人が人としてではなく物や工具となり、大きな機械の小さなネジになる。〈疎外〉とは何か。人が金銭を崇拝し、物質、偶像を崇拝することであり、生産のための生産人、消費のための消費人となり資産階級は宣伝によって大衆を操縦し、影響を及ぼして人民の意識を腐蝕させる。…資本主義は世界の資源を極度に浪費し、環境を破壊する。資本主義社会は一個の不合理社会、不公平社会、非理性的社会だ。われらが認めるのは、マルクス、フロム、マルクーゼ、フーバーマンとスージ、バクーニン、クロポトキン、ドムホフ及びブクーチンだ。これらの人々資本主義を批判し、精密でその対資本主義社会批判は大部分、われらの受入れるところである。

(3)われらは一九一七年のロシア革命を無産階級の革命と認める。…しかし今のソ連は強権的官僚専攻的階級社会である。（このあと(4)ウクライナのマフノ運動、クロンシュタットの蜂起をあげ官僚化していったソ連の社会を追究している。）(5)ソルジェニイッツイは別に無政府主義者とはいえない。彼は資本主義の発生に好感をもち、ソ連の強権主義に痛憤しているが、同時に資本主義に対する正しい認識に欠けている。しかし彼の環境生態系統についてのソ連領袖宛の公開状は、精密な見解であり、これは近代無政府主義者の自覚すべき主要な問題である。（中略）(6)われらが学習するもの、一八七一年パリコンミューン、一九〇五年ロシアのソビエト、一九三六年スペイン革命労働者団、一九一八〜二九年ドイツ労働者議会運動、一九五六年ハンガリー労働評議会、一九六八年フランス労働者学生委員会、(7)（中略）一九六八年フランス革命の重要な意義は西方の高度に発展した資本主義社会で革命は可能だということであった。(8)中略、(9)今日「社会主義国家」を自称するのは、中国、キューバ、

TIME IS ENERGY

A friend of mine, H. Akita, told me the other day an interesting philosophy of his as follows:

Time is energy. Therefore time has mass. Therefore time that pervades throughout the universe must be subject to gravitation of planets or heavenly body, or time gravitates toward planets. Therefore time, as is the case of air, is dense on the surface of planets and thin in the middle of space between planets.

That is, influence of time is more stronger on the surface of planets than the space where gravitation is weaker. Where there is very little mass of time, very little biological process, or transition or change of matters will be made. For instance, if a living creature stays in this area it will not much get age and survives longer.

Now, refer to the scrap of the Japan times, June 21, 1976 attached herewith, where you will note that gravity influences time. This proves that time is mass or has mass and therefore is energy.

Einstein's theory which reads 'clocks will run faster than normal where gravity is weaker than normal, and slower where gravity is stronger' may be deviated from my said idea, but here again I should emphasize that it proves time is influenced by gravity, which proves time is or has mass, or may as well say time is a particle and/or wave untangible.

JAPAN TIMES June 21, 76

Physicists Prove Einstein's Theory

COLLEGE PARK Md. (AP) — Using clocks that measure billionths of a second, a group of American physicists has made the most accurate proof yet of one part of Einstein's general theory of relativity.

According to a major prediction of that theory, clocks — and biological processes — will run faster than normal where gravity is weaker than normal, and slower where gravity is stronger.

Prof. Carrol Alley's group measured the speed-up on super accurate atomic clocks that were carried 10,000 meters above ground on five 15-hour airplane flights.

When the clocks were compared with some kept on the ground, Dr. Alley said, the researchers found the airborne chronometers had gained an average of 45 billionths of a second.

That's a pretty small amount. But the significant point is that the clocks on the ground kept one sort of time; those in lighter gravity kept another.

(Augustin S. MIURA)

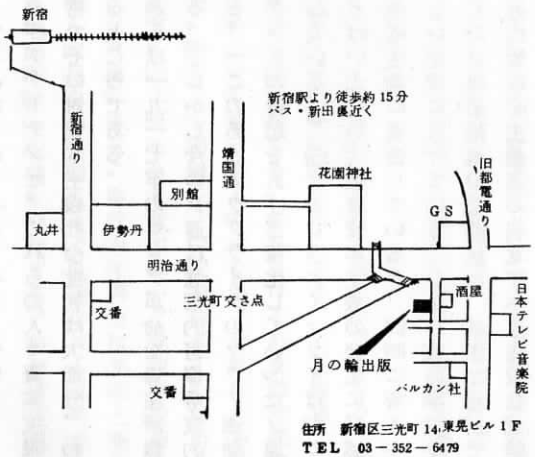
越南、カンボジヤであるが、これらはすべて民族解放運動からでて居て政権担当者は民族運動の領導者である。

ところでこの運動が起きた時、既にロシア革命は堕落していたし、運動支持者は主に貧窮な農民で、またあの地方では工業が遅れるとか未発展で労働者階級も弱かった。そこである「解放運動」は自覚的にまた無自覚的にソ連の反革命的種々の欠陥と堕落したものを受入れたのである。その上殖民主義や帝国主義が経済を操縦したので「解放運動」は枠組みを跳出することができなかった。つまり「解放運動」の勝利のあとで樹立した政権は当然圧迫的欺まん的搾取的なものになるのである。

中国の農民は米国・欧州・日本の帝国主義に対抗した運動を起したが、結局、ソ連的官僚階級的政権と専政を招来した。農民は官僚を助けて権力を奪取したが、官僚階級の暴力と搾取を受けるのは彼等農民だった。現代は官僚の権力が隆昌し、農民に対する高度の搾取を樹立している。中国、越南、キューバ、カンボジヤ、いづれも同じだ。…

官僚達は労働者階級を「解放」できない。彼等は労働者の生活環境を改善することもできず、全社会の権力と財富を手中に納める。ところで官僚による統治によってまたしても階級闘争を消失させてはならないのである。古くからの階級圧迫と闘争は全く新らしいものに取って代るのだ。

（無政府主義小組）

★リベルテール・サロン★

毎週火曜、午後六時半より九時（祭日、スト日中止）誰でも参加可です。前と同じようにおしゃべり会ですが、討論、提案などどんどん持ってきて話して下さい。